



感染性腸炎 A to Z 第2版

大川清孝・清水誠治 編

中村志郎・井谷智尚・青木哲哉 編集協力

●B5 頁296 2012年
定価 8,400 円(本体 8,000 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-01642-1]医学書院刊

本書は、感染性腸炎に関するあらゆる知識・情報が特徴的な内視鏡像とともに解説されたアトラス的实践書である。4年前に発刊された初版が好評であったことから今回改訂版の出版に至ったわけであるが、初版で掲載された項目の改訂にとどまらず、疾患の項目数と症例数が大幅に増え、さらに充実した内容となっている。

本書の編集を担当した大川清孝、清水誠治の両氏は、消化管、特に下部消化管疾患の診療ではわが国を代表するエキスパートである。両氏が主宰する「感染性腸炎の内視鏡像を勉強する会」という研究会で十分な時間をかけて検討された1例1例の症例が本書の骨子となっている。今回の改訂版では、この研究会で検討されなかった珍しい症例や疾患についても研究会メンバー以外の専門家によって執筆されており、まさに“A to Z”という表題にふさわしい感染性腸炎の実践書としてできあがっている。

原因不明の難治性炎症性腸疾患(IBD)である潰瘍性大腸炎とCrohn病が近年急増しており、その診断過程においてしばしば感染性腸炎との鑑別が問題となる。特に、副腎皮質ホルモン、免疫調整剤、抗TNF- α 抗体などの薬物治療が主体となる重症例や難治例では、感染性腸炎の除外診断は必須である。感染性腸炎をIBDと誤診すれば、誤った治療を選択することにつながり、病状の悪化を招くことになる。鑑別診断に際しては、糞便や生検組織の培養結果とともに内視鏡・生検所見が鍵を握る。すなわち、各種感染性腸炎に特徴的な内視鏡所見を知っているか否かが正しい診断への第一歩になると言っても過言ではない。このような観

点からも、本書発刊の意義は極めて大きいと考える。

本書は、感染性腸炎の総論に始まり、細菌感染症、ウイルス感染症、クラミジア感染症、寄生虫感染症と原因別の各論が続いている。各論の大項目はさらに原因微生物ごとに36個の細項目に分けられ、それぞれ疫学、病原体、症状、診断、画像所見、治療についての要点の記述の後に症例提示がなされている。提示症例数は初版に24例を追加した64例に達するが、1症例ごとに見開き2ページの構成で、左ページに症例のプロフィール、右ページに内視鏡写真を含む画像が掲載されている。さらに、各症例には「本症例のポイント」と題した囲み記事の簡潔な説明があり、鑑別診断の要点を理解するのに役立つ。提示された多数の内視鏡像はいずれも美しくかつシャープな写真ばかりで、画像だけを見ても何となく楽しい気分になる。すなわち、初版の序で編者が述べているように、「本書は内視鏡からみた感染性腸炎の本」であると同時に一般的な感染性腸炎の知識も網羅した“A to Z”の名に恥じない内容となっている。

最近の学会でしばしば主題のテーマとして取り上げられている「潰瘍性大腸炎に合併するサイトメガロウイルスなどの感染性腸炎の診断と取り扱い」についても、独立した項目で解説されている。また、わが国ではきわめて稀なウィップル病やイソスポラ症の症例も提示されている。このように、本書は既知・最新の情報から稀な疾患まで感染性腸炎に関するすべての情報を包含した優れた実践書であり、初学者からベテランまでのすべての消化器内視鏡医にぜひお薦めしたい1冊と考える。